

## 学生論文特集 (1)

# 私のなかの日本人

## 読書感想文

### まえがき

外国産の物差しを使って、われとわが身を裁断するというのが、これまでの日本人の通例であった。他方また、それにあきたらない人達は、日本古来の涼風美俗または伝統にかえれと、声高に叫んできた。しかしその双方の主張とも、肝心の自分自身のことについて冷静に眺める態度をどれだけ身につけていたのか、甚だ疑問である。他人を批評することは易しい。しかし自分自身を省くことは至難のワザである。

倫哲科では、以上の課題に迫る一方法として、夏休み中の宿題として18冊（下に掲げてある）のいわゆる“日本人論”または“東西文明比較論”を選び、各科学生（三年生）にそのうちの任意の一冊について読書感想文を書かせた。ここに選んだ8篇は、それらのなかの代表作品である。それぞれの文章は、内容紹介を中心としたものあり、あるいはまた、自己の感想や意

見を中心にまとめたものあり、長短優劣さまざまであるが、あえて文体の統一をとらなかった。それは、各筆者の個性をできるだけ正直に反映させたかったからであり、紋切型の文章の羅列を避けたかったからでもある。それゆえ、よくまとまった文章でも、あまりにもソツなくまとめた文章は、避けることにした。舌足らずでも、問題提起の役を果たしてもらいたかったからである。

各科2名ずつ、そして「ヒブリア」の限られた頁数という制約のために、心ならずも採用を見送った文章もいくつかあるが、ともあれ、ここに採用した8篇を手掛りとして、学生諸君が“私のなかの日本人”についてより深く考えてくれることを願っている。（なお、絵図2枚は、3土・菅野勇浩君の作品である。印刷の関係から、原画のデリケートな味が十分に表現できなかったのは残念である。）（芋川平一）

### 参考(18冊の本)

- |                             |                          |                          |
|-----------------------------|--------------------------|--------------------------|
| 01) 会田雄次 日本人の意識構造 現代新書      | (7) D・キーン 日本人と日本文化 中公新書  | 09) 鷗見和子 好奇心と日本人 現代新書    |
| 02) 梅村その他 日本人の知恵 中公文庫       | (8) 堀一郎 日本のシャーマニズム 現代新書  | 04) 坂元 日本人の論理構造 現代新書     |
| 03) 土居健郎 「甘え」の構造 弘文堂        | 09) きだ・みのる にっぽん部落 岩波新書   | 09) 鈴木孝夫 ことばと文化 岩波新書     |
| 04) 赤塚行彦 「氣」の構造 現代新書        | 09) 丸山真男 日本の思想 岩波新書      | 06) 鱒田豊之 肉食の思想 中公新書      |
| 05) イグナツベンダカン 日本人とユダヤ人 角川文庫 | 01) 中根千枝 タテ社会の人間関係 現代新書  | 07) 西尾幹二 ヨーロッパの個人主義 現代新書 |
| 06) ブレスベネディクト 剣と刀 現代教養文庫    | 02) 斎藤正二「やまとだま」の文化史 現代新書 | 09) 増田四郎編 西洋と日本 中公新書     |

イザヤ・ベンダサン

## 『日本人とユダヤ人』(角川文庫)

3C 伊藤隆司

まず一番驚いたのは、このイザヤ・ベンダサンという作者です。この人は、いったい何人なのでしょう。作者自身は、ユダヤ人だと書いていますが、ほんとうにユダヤ人なのでしょう。

あまりに、日本と日本人というものを知りすぎているように感じられます。日本人の精神構造、日本の歴史、風土、文学など、日本人以上によく知っています。

しかし、考えてみれば、この作者がユダヤ人であるからこそ、日本と日本人というものを客観的にみつめることができたのかもしれませんが。

本の内容をなるべく批判的な目をもって読もうと勉めてみたのですが、余りにうなずくところが多くて、びっくりしました。

主な章を上げていけば、まず、一番初めの「安全と自由と水のコスト」という章では、世界各地に散ったユダヤ人が自分の生命を守るために大きな犠牲を払っている様子と、日本人の安全というものの考え方を書いたものでしたが、確かに、自分を守ってくれる国家というものが信じられないということは大変なことだと思います。

現在の日本人は、いろいろの小事件は絶えません、安全な国だと言えらると思います。テレビや新聞などで報道されているように、中東やキプロスでは、日常生活の中に戦争がはいる込んでしまっているのに、日本では、その様子をテレビで見られるのですから、安全そのものです。

日本は、現在までに幾度か戦争を経験してきましたが、異民族が本土に上陸してきて戦ったことは、一度もありません。

そんなことを考え合わせると、日本人というのは、決定的に、自分の安全が脅かされたことがないようです。だから安全というものは、常に保たれているのが自然であり、それに代障を払う必要は、まるでない、と考えがちなのではないでしょうか。

また、「しのびよる日本人への迫害」という章では現在、起きつつある排日運動を予期しているようで、全く驚いてしまいました。

支配者である白人と被支配者である有色人種、その間にあつて、巧みに富をたくわえている日本人、その日本人が被支配者階級からの迫害を受ける。

このようなことは、確かにありうることだと思います。事実、東南アジア、朝鮮などでは排日運動が盛んになりつつあります。ユダヤ人が受けた運命と同じに

なるのではないのでしょうか。どうも、日本人というのは、一人よがり、他の国のことを考えないところがあるのは、とても恐ろしいことだと思います。

日本人とユダヤ人を比較して、その性質の違いを書いた「クロノスの牙と首」や「日本教徒・ユダヤ教徒」という章は、日本人というものを的確に捕えているように思いました。

日本人は農耕民であり、ユダヤ人は遊牧民。その生活の違いから、考え方、性質というものが違ってくる。そんな作者の考え方に共感しました。

確かに日本人は、いつも時間に追われて生活しているように思います。最近、「日本人は働きすぎる」という考えがでてきて、週休二日制が普及してきましたが、二日休んだにしても残りの五日は、前の通りに、あくせく働くのが、日本人というもののよう気がします。

この作者が言っている「日本教徒」という考え方はいい所をついた、おもしろい文章だと思います。

神を信じるのが宗教だと考えがちですが、日本教の中心の考え方は、「人間」というものなのだそうです。

この本で言っている、「人間」とか「人間味」と言うことを、ぼくたちもよく気にかけています。たとえば、「あの人は、人間味があるが、あの人は人間味がない」とか「あいつはいいやつだ」とか。人間味と言う言葉が非常に深く、言葉を越えたもつと感覚的なもののように思います。どういう人が人間味があり、どういう人が人間味がないか、という規準は、生活の中で感じとったことば以外のもので判断しているように思われます。

ぼく自身もこのような考え方を持っています。いくら洋服を着て、洋食をとったにしても、ぼくという人間は、やっぱり日本人でしかありえないということを感じさせられました。

「プールサイダー」という章も、なかなかよく日本人というものを捕えているように思えます。日本人は批判が非常にうまい。日本には、たくさんの批評家がいっているろと批判しています。しかし、それがほんとうに聞かれることは、めったになく、時とともに消えさっていくのです。

「言いたいやつには、言わせておけばいい。」という考え方が、日本人の中に生きつづけて、人が言ったことを聞くか聞かぬかは、その人の勝手なのです。

この考え方は、確かに存在すると思います。自分というものが、はっきりとある上で、人の言うことを聞き、聞きたいところだけ聞いて、いらぬところは、聞き捨てにするのです。この考え方も日本人の中に存在すると思います。

この本を読んで日本人というもの、日本人である自分というものを客観的に、見ることができたように思いました。



きだ・みのる

## 『にっぽん部落』(岩波新書)

### 3 E 四 家 巖

この作品の舞台になっている部落は、東京都の西の端にある恩方村の辺名部落である。きだ氏はこういっている。「この部落の寺に(筆者は、廃寺の庫裡に住んだ)一人取り残され、部落の14軒の住民とつき合ったり、日本の他の部落を観察するようになったとき、私の住む辺名部落が、組織と思考、感情、行動の点で部落的に比較的純粹であることが解り、それと知らずではあったが、偶然とはいえこの部落を選び、その住民とつき合うようになった幸運に感謝した」と。以下内容を紹介しつつ私の感想を記してみたい。

部落の生活で根本的に大切なことは何か。それは何事につけても部落が一つに纏ることだ。如何に部落が小さく、お念仏でいうように毎日に、そして朝に晩に顔を見上げ見下ろしている親しさの雰囲気の中にあるといっても、すべての問題にすべての住民がすべての機会に常に同じ意見であり得ないことは明らかだ。したがって部落が一つに纏るには、他に対する自発的服従或は自己規制が必要となる。そこで、村でいう親方或は世話役が必要となる。世話役にされるのは人格者と部落でいう型の人間が一番で、これは博打ち(賭博)をしたり、ずる賢さのない、おっとりした型で、しかも他人に乗せられないほどの賢さを具えた人物だ。そして部落の住民が頼みに来る雑多な暇つき仕事を厭な顔もせずしてやると、自然、住民たちの信頼が集まり、その人のいうことなら聞くことになり、その人をみんな世話役に祭り上げることになる。

では親方或は世話役はひとりで部落の住民〔平(ひら)と叫んでいる〕を何人世話できるか。ぼく(きだ氏)の調べた範囲では、こうして一人で直接に世話し纏められる軒数は10軒内外から16軒内外、5人一家族

とすれば大体50名から80名くらいということになる。そして時としては、それは部落を越え、現代の新しい組織体に対しても有効のように見える。すなわち、雇われ世話役である分隊長、係長、課長では、部落の標準より少なく6、7人から10人の配下をもっているものだ。10軒15軒の部落に自然に一人の世話役ができ、一本に纏ってゆくとき、そこにはすでに過去につちかわれた伝統或は集団反射が働いている。そして世話役本人の、村でいう「人格者」的素質、人徳、鷹揚さなどがあれば、平の心服は十分で、近代的組織につきもののオルグ的イデオロギー的なものが入る隙はない。しかし成員が150家族となると、仮りに一人で世話できるのが10~15軒とすれば、10~15人のXマン、影武者、オルグが必要になり、彼等は総親方を具現し、脱落を阻止せねばならない。彼等の活動の公式としてイデオロギー的なものが必要になり、説得の技術としては、論理から厭がらせ暴力まで動員されることになる。一方、平は人相も特徴も消えはじめ番号になりはじめ、15戸では人間であったところのものが、150戸では番号つきカードになりはじめる。番号つきカードの発生とイデオロ、オルグの発生は、機を一つにしているように思われる。

部落のものの感じ方、行動のし方にはふた通りの源流があるように見える。一つは部落の伝統或は集団起源の反射運動に従う行動と、もう一つは自分の損得に従う行動である。前者を集団的に見ると、部落の住民は公平、衡平、平等などについては意外に敏感で、伝統はそれを実現するため人知のすべてを盛りこんだ形跡があり、それでもなおかつ人間そのものの条件である不完全さのため、精神の要求する完全な公平が実現できず、それによって起こる不満羨望を取り除くためにも、これまた人知のすべてをつくしている。薪の分配のときこれが最もよく表われて、その方法は籤引きである。籤掛りの自分欲もえこひいきも顔を出せはしない。こうして人間が公平にしようとしてもなおかつ残る不公平、ここでは分配される薪や裏っぱの多少の差の不平を封鎖するために、籤が登場するのだ。籤は人間に随伴的な欠陥を埋めてくれるという意味では神の手だ。ともかくも、薪を看貫にかけたり籤を引いたりする薪分を見て、部落人たちの公平感、公正感にはくは感心した。それはうまれつき部落人がみんな公正な性格であっても生まれ得るが、これは日常に部落人を観察しているぼくには事実と一致しないように見える。それはむしろ、部落人たちの生きようとする意欲が強烈で、機会があれば、また人目を盗めたら、遠慮なく自分欲をかこうとする性格が互いに牽制し合い戦い合い、他人の取り分を監視し合った結果生まれたとする方が、部落の現実にも進歩の観念にも一致する。

親方或は世話役は、何の制限もなく平を支配できるわけではない。世話役が住民たちを、恨みや不満や不平

なく纏めてゆくためには、これらの社会反射に従う方が従わないより楽にできることは明らかである。住民は世話役に服従しているのではなく、伝統に服従しているのである。伝統を護持するときだけ住民の世話役への無償の自発的服従は可能なのだ。伝統的部分的修正でも住民に疑惑を起こさせ、新しいことに服従させるには、世話人の側に非常な信頼或は人徳を必要とする。それのない場合、民主主義社会では買わねばならない。いや信頼とは、いうことを聞いていれば損はないことであり、人徳とは、これまた公平と正直さ、ケレンのなさ、物吝しみのしない、またこだわりのない風格を指し、損得勘定でも平にプラスになる印象を与える人物のことだ。

世話役や親方は部落議会で議長席に当る上座に坐る。議員は各戸の世帯主一名ずつ。選挙も要らねば、男女の別も年齢の高低も問わないし、また世帯主が何かの都合で出席できないと世帯内の誰でも代理列席が認められているので、部落議会でどんなことが話されたか、またどんなことが議決されたか各戸に徹底する仕組みになっている。これは、議会のうちいちばん民主的で、これ以上に民主的な理想的議会は作れはしない。決議はいつも全会一致方式、全会一致になる見込みがなければ決はとらない。多数決に慣れた都会人たちには、これは不思議にも作爲的にも見え、少数派の尊重とも圧殺とも取られ、しばしば封建的反動とも断ぜられているが、これは当然ない。部落は人数が少なく朝に晩に顔を会わしているので、鬼っ子を作っては部落の運営がうまく行かなくなる。総評も重要問題では70%で賛否を決め、政党総裁選挙では出来れば恨みを残さないため全会一致にしたがる。\*「そらあ、多数決の方が進歩的かもしれねえが部落会議にゃ向かねえや。多数決つうなあ決戦投票だんべえ、ここいらで決めるのはわが身の損得になる問題が多いんだわ。だから負けた方は論には負けるし銭はふんだくられるし、仲よしも向こうにつくではどのくれえ口惜しいか解るめえ。だからその恨みが何時までも忘れられず残らあ。それじゃもう部落はじっくり行かなくなるんで、部落会じゃやりたがらねえのよ。部落議会じゃ村議会でもそうだが、10人中7人賛成なら残りの3人は部落のつきあいのため自分の主張をあきらめて賛成するのが、昔からの仕来りよ。どうしても少数派が折れねえとときにゃあ決は採らずに少数派の説得をつづけ、説得に成功してから決を採るので、満場一致になっちもうのよ。それに数が少ねえもの。部落が仲間割れしちやあ、少数派は元より多数派も、茶飲みに行く家の数がへつうまかあねえもの。

部落には掟がある。部落に育ち部落に住む者なら、このことは物心ついたら事ある毎に親たちにいわれて知っているし、それに違反したら自分がどうなるか知っている。この掟、それは刃傷するな、他人の家をつん

燃すな、盗人（ぬすつと）するな、部落（むら）の恥を外にさらすなの四章だ。前三章は明瞭だが、第四章は注釈を必要とする。これは一種の美的措辞で、正確な表現は警察に密告するなどということだ。それは何故か。国の正義の末端の代表の警察が犯罪とするものは、部落が犯罪とする前三章以外に多く、それらは部落では犯罪とっていないからだ。

密猟についてはこういつている。一本の杉にはすでに苗代、植つけ費などがかかっているのだ。むぎむぎ兎に食わしてなるものではない。害獣狩り許可を受ければと人はいかも知れないが、届を書いたり判コを捺したり、それを地方事務所に出したりする面倒は部落人の好まないところであるのに加えて、この許可がおりるまでの何か月間、兎が住民の財産を日日夜毎に食い荒すのを安閑として見ていられるものではない。こんな事情の下で密猟は部落の緊急防衛措置なのだ。部落の利益を守ることが大きな社会の利益に反しないとき、手続きを省略して法の本質を生かすことだであるだろうし、また手続きの揃った反社会的行為もあり得ようというものだ。部落の軌道に乗った者にとって、部落の必要は国法に先決するのだ。部落の方が彼らの生計の場だ。その必要を無視してそこと少しの関係もない東京の大ビルのデスク内で決めた掟に従えたものではない。

部落内における「義理」というものについてこういつている。「聞く義理があるからその人のいうことを聞く」という表現を部落で聞くと、これは至極もつともなことで響く。それは、親方、世話役がその人柄のため、ふだん世話している10~15、6軒の平に深く信頼され心服されていて、互いにいうことを聞きもすれば聞いてももらえるという親密な関係や、朝や晩に顔を合わし言葉を交わしているという条件から生まれる、歴史的で、しばしばポトラッチ的にまで高められる感情叢を、背景にしているからだ。この背景を取り去って「聞く義理があるから聞くのだ」と抽象的公式的に表現すると何か物足りなくなる。これは抽象表現の不可思議だ。部落の暮しから抽象して、ひとたび「聞く義理があるから聞く」という公式をつくと、それを生んだ感情叢は消される一方、それを生んだところにはなかった無限の応用を持つことになる。この例にインスタント義理というものがある。次のようなものである。神社にする願掛け。村議会の際、村長の了解運動（酒か銭こか女による）で、全会一致した件、市会議員の選挙のとき（ある候補の運動員のことは）「選挙運動って投票日の前夜から朝にかけて500円札を配ってインスタント義理を設定するのが本命で事前運動や拡声器で呼ばったり立会演説なんかつかけたりだ」などである。

ところが別の親方は、聞く義理というのは理屈以前の感情の雰囲気だといっている。頼む方も前にいろいろ面倒を見ているからそれくらいはやってくれようと

か、頼まれる方も前の世話のお返しにやってやるべえとか、そんなことは考えに浮かんで来ないのだ。用があるから自然に頼む気になって頼み、頼まれた方も無心に頼みを引き受けるのだ。平の方も同じだ。毎日会って口の利き易い世話役にものを頼むのだ。部落の者が時々使う朋友（ボンユウ）という言葉の中にはこんな関係が含まれているように見える。人徳ということばが鮮明に生きてくるのはこんな感情雰囲気の中だ。部落がうまく行くとき、親方や世話役は平から愛慕敬慕され、平は前者から可愛がられていると表現していいだろう。こうして平は自然に親方のいうことを聞き、親方も平のいうことを叶えてやる。これは人為的に組織されていないところでの上下のつながりだ。

部落では政府をどう思っているのかとたずねると、  
“そうよなあ。国っておれら下々から銭をとり立てる仕組だんべえ。上っ方はどうか知らねえが、おれらが知っとる税務署の小役人なんか見ていちゃ、そうとしか思えねえ。”  
“そうよ、酒、煙草、塩だつて政府の儲けはでけえからなあ。荒稼ぎだわい。商人の儲けなんかとケタ違いよ。それだけ村の衆の銭は政府に吸い上げられてしまうのよ。稼ぎの弱え村の衆の銭が無くなるのも無理はねえや。しかも政府は部落のために何もやっちゃくれねえや。”  
“普段はこんな風に稼がされ、戦争になると一番死者を出してよ。難儀なのは部落だよ。上っ方はいいなあ。平生は収入はいいし、戦争は高見の見物だよ。おれらはずっと上っ方たちに利用されているんだわあ。”  
部落の中には支配層に入ろうという野心を持ったものはいないのだ。部落では住民たちは生まれ、育ち、働き、しがない暮しを立てて生殖し、子供を残し、安楽に死ぬことしか求めていない。これは平和を一番求めている集団だ。

ここで都会人と部落人との違いを決定的に述べている。工場労働者は都会に暮しているので月給取りの鷹揚さで、言葉も信じよう。ということは宣伝にも乗ろうし他人の理想や口車にも燃えられよう。実質的な銭こ以外のことなら、文字で読んだだけで信じ得よう。百姓は違う。言葉に乗って理想に浮かれるなどはとんでもないこと、生活を見失うことだ。それは自分の労力と技術を売りにかえて暮す単独企業者で、彼の理想は銭こを他人からひんむくことだ。借ずるのは自分の感官を通じて知ったことと部落の掟とつき合いだけだ。

ここに書かれた部落についてのことが、私の家の近所によくあてはまるのでおもしろい。さすがに部落とはいわないけれども隣組（組）がこれにあたる。組の軒数は13軒でこれもうなづける。組の中の一軒が順番順番に回り、旅行費（年に一度、組全体でどこかに旅行に行く。月1000円のようなものである。）を集めたり、納税（税金のこと。年末に精算する）を集めたりする。世話役が隣組長（組長）に相当する。世話役になれるのはいわゆる人格者だと部落ではいっているが、組長は

この必要はない。ほとんど雑用の引き受け役だからである。そしてこの役も二年位の交代で順番に回ってゆく。村会がこのこの近所でいう無尽（むじん）である。これは毎月23日に「宿」（これも順番にまわる）に組員が集まって話し合いをする。世帯主の代理も認められていて話の内容が、隣組内の誰でもわかるようになっている。しかし考え方は、部落民のいうように銭こを他人からひんむく……ではないようだ。ここでいっている都会人の考え方にずいぶん近くなっている。これは場所的、人々の職業（この辺はいわゆる農村ではない）、それに時間的に（これが書かれたのは1967年）くい違っているせいだろう。このように作品の中のこととよく似たことを身近に体験できたことは、内容を理解するのによい助けとなった。

西尾幹二

## 『ヨーロッパの個人主義』

（現代新書）

3E 伊藤道男

筆者西尾幹二氏は、この本でこの本の題名である「ヨーロッパの個人主義」について述べようとしたのではないことが、この本を読んでいて感じられる。ヨーロッパの個人主義のこを書いているところは、非常に多い。しかし私が考えるには、筆者はこの本を通して、文明や社会というものを人間というものの立場から考えようではないかという問題を、読者に投げかけているように思われる。

それでは日本の社会というものを考えてみよう。日本人はいまや、この空漠とした技術文明の潮流のなかで、何をめざして生きていくのか。日本はヨーロッパで誕生した思想や理念や技術や発見を柱にして、こんにちの日本人の生き方の主要な部分を組み立てている。しかしこれは、ヨーロッパ的な意味における「社会」が存在しているといえるだろうか。

ヨーロッパでは、さまざまな国が乱立抗争しながら、結局は一つの文化共同体として存在している。当然その国家内部に形成される「社会」も、また国家同士がつくりだす「社会」も、この日本のように孤立した島国特有の論理とは別種のものとなるのはあたり前に思える。ここで重要だと思われるのは、ヨーロッパ人の市民意識である。それは近代国家の成立以前に、萌芽としては存在していたものであったに違いないだろう。市民のひとりびとりにとって、公共に生きるのは外敵に対する用意からであろう。社会に対する責任と自由の制限は、ヨーロッパ市民社会の二つの条件であり、それはまた、市民が、個人の自由の無制限の拡大が何を意味するか、その恐ろしさを知っているという意味でもある。この我欲の相互調節が、個人の生き方に、パターンのきまった「型」や「様式」をもたらすもともなる。ひとつの

都市という「社会」の範囲が与えられることで、市民のひとりびとりが「個人」となるのである。

日本人の意識はどうかと考えると、文学界や思想界にときどき姿をみせる道徳主義的な国家超克論の表ばかりが威勢のいいインターナショナリズムやアナキズムは、よく考えれば自分が現にそこに住む自然国家日本への依存心の上に成り立っている場合が多い。このことは、日本人が近代人としての意識が未成熟であることを証明しているのではないだろうか。

次に文化について考えてみよう。スペインの哲学者マダリアーが次のようなことを述べている。

「ヨーロッパの特性である統一性と多様性がともに発揮されているのは、次のような場に見出されよう。統一性と多様性を発揮する場として自然が与えた「コップ」は、かなり個別的で輪郭のはっきりしたもので、歴史的、心理的な人間の型、人類の文化的収穫を育てあげることができる。……………ヨーロッパ人は全部混血であり、とくに都市に住むものがそうだ。だから、どのヨーロッパ人のこころの奥底でも、そこに住んでいるいくつかの血の記憶のあいだでいつも会話がつづけられている。ヨーロッパのパラエティーは、心の中で会話するこれらの「性格」のおのおのに対し、活発な論争を呼び起こすに足るだけの豊富さと明確さを与える。……………」

筆者は、これをヨーロッパ的な「個」のあり方を上手に語ったものといっている。個体をつつんでいる文明全体の多様性と統一性、それは筆者が強調しているヨーロッパ的「個人」を生みだした自然的、歴史的条件であろう。

そう考えると、われわれ日本人の精神風土は、こうした条件からことごとくはずれている。日本という国が、多様な文化に境を接していないことは、日本内の文化が、多様性を失い均質化してしまうことも意味するのであろう。だからまた世界の多様な文化を、われわれは抵抗感なしに取り入れることができるのではないか。そのため取り入れたものが、今度はことごとく平均化されてしまうおそれもあるだろう。日本では自分の属する集団を昇格させるとき、その特殊性を失なわせ他に似せていくという方向がとられるが、これは自他の境界をはかしてしまうという日本的性格がそこになんらかの作用を及ぼしているのではないか。明治の初頭に文化の根本源理を西洋に求めたわれわれ日本人は、まず西洋近代のものさしによって、それまでの日本の統一文化を否定した。またその再認識の方法や形式までヨーロッパに教えられた。「西洋化」は今日に至るまで依然として表面的なものでしかないが、その表面性は内部へ向かって破壊的にひろがる滲透性をもはらんでいるのはこの本を読まなくても気づくことであろう。

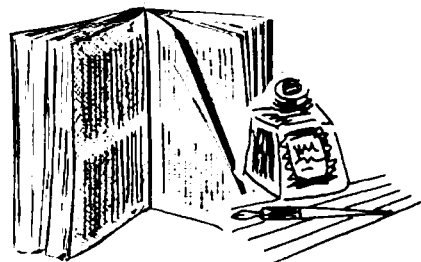
最後に、私がこの本を読んでいて特に目にはいった場所の感想を述べてみよう。そこは「自己無批判の知識

人」という表題の個所である。実際日本の知識階級ほど、自分を笑うという精神のあり方に不得手な人種はない。民衆よりも政府よりも一段高い地位に自分を置いて民衆を啓発する思い上がりや世俗に白い眼を向けるルサンチマンとが結合した感情複合が、西洋的な理論や概念に接しているはずの知識階級のなかでもっとも顕著である。ヨーロッパでのキリスト教文化を食べていないのは、知識階級も民衆も同じである。だが日本の民衆生活はそれなりに首尾一貫している。このことは長所であることも考えられる。だが概念や観念でいちばん西洋世界に接している知識人において、日本人本来の無差別的、自己無批判的な生き方が、近代的な認識や行動をせまられる時に「弱点」としてあらわれる。なぜならこの二つを区別せず漫然と無自覚に生きているからである。

「自由」や「平等」の理念がじっさいありもしない空想のなかで異常に熱っぽく追求されたり、ヨーロッパを追い越したとか追い越さないとか、たえず文明の「進歩」の度合いを気にしたりするのも、ことごとく近代日本のそもそもの成り立ちに関係あるからであろう。

「平等」ということについて考えてみよう。なにが等しければ平等であるのだろうか。ふつうの日本人では答えがでない。この世の人間的なものには全てに等しいということがないといえるだろう。ところで西洋では、キリスト教では、人間はすべて罪人で神の前にひざまづいて救いをこわなければならず、悔い改めれば罪が許されるという点などで平等である。天（神）が人間を作られたと信じている人、クリスチャンでなければ、平等ではないのである。福沢諭吉が「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」といったが、神の存在しない人、日本人に、平等などないように思われる。

この本での問題は、人間の生き方であり文化に対する考え方にあるのがわかる。筆者のいいたいことはひとことといえば、文明や社会の立場から人間を考えるのではなくて、人間の立場から文明や社会を考えたいということにつきてであろう。



会 田 雄 次

## 『日本人の意識構造』(現代新書)

3 土 佐 藤 政 弘

作者はまず、競争の姿勢、守る姿勢についての日本人と欧米人との違いから、日本人特有の「うつむきの姿勢」というものをうち出し、それから日本人独特の物の考え方が出てきていると指摘している。

作者はお金と暇があるとみえて、よく海外旅行に行くそうで、前にアメリカに旅行した際、いろいろな家からよく招待を受けたのだそうだ。そんな時、その家の奥さんに次のような質問をしたそうである。「奥さん、すみませんが、今あなたが、あなたのかわいいお子さんといっしょに森の中かどこかを歩いていたとします。すると向こうから突然自動車とか熊が、あなたがたに向かって突進してきたとします。そんな時、どういう格好をして子供を守るか、あまり考えないで咄嗟の場合の姿勢をとってみてくれませんか」と。そんな時、彼女たちのとる姿勢は、ほとんどみな同じで、日本人のそれとはまったくさかさまなのであるという。それでは、どういう格好をするのかというと、まず子供をうしろにはねのけ、敵に直面し、両手をひろげ「仁王立ち」になったのである。それでは日本人の姿勢とは？まず、子供を自分に対面させるように前に抱き寄せ、敵の方にお尻を向けずくまるという防御態勢なのだ。言われてみればそのとおりである。われわれ日本人は大切なものを敵から守る場合、その大切なものを抱き寄せ敵にうしろを見せるという格好なのだ。

また、このようなことは他にも見られるというのである。欧米人は、鉋や鋸は押して使うが、日本人は引いて使う。それから鉛筆を削るとき、日本人は押して削るが、欧米人は手前の方へ削る。マッチも、日本人は押してするが、欧米人は引いてする。錠のあけしめの方向も日本と欧米とでは逆なのだそうだ。このように、日本人と欧米人が単に肉体的動作だけがさかさまであるというのなら、それだけで別にどうということはないのだけれど、前のように子供を守る保護動作、守備動作までもさかさま「正反対」であるということから考えると、これは日本人のあらゆる精神姿勢、物の考え方などの根本のものが、さかさまなのではないかということになる。

それゆえ、日本人には、敵というものはうしろからやって来る、だから自分もうしろから攻めた方がいいという考え方が生まれてくるのだと思われる。欧米人の場合、どうしても外部の方がより強く認識される。しかし、それと反対の観念を持つ日本人にとっては、競争の場合、内側に敵を求めるということになる。そんなわけで、日本人の場合、必ず内部に敵ができ、陰惨な内ゲバが起こってくるのである。

たとえば教育においても、このごろは受験地獄などと言われ、中学校も高校も受験予備校のようになっていて、本来の教育が出来なくなっている。そんな中で子供たちの一番のライバル「敵」は、隣にすわっている親友であり、隣の家の遊び友だちなのである。いつしかそういう者たちを、自分の敵であると意識するようになる。その結果、集団教育の最大のものである友情を得るところか失ってしまうことになりかねない。

企業においても、出世競争はまず同業者からという形で競争相手を選んでゆく。

このように日本人と欧米人との精神構造を比べてみると、独自の性格を持っているということ、われわれは自覚しなければならぬし、また反省もしなければならぬであろう。

日本人はまた、昔から外人が来たら歓迎するという観念を持っているらしい。毒をもって毒を制すという政治工作は、歴史上本当に行なわれたことはないだろう。このように日本人の外部世界に対する目が極端に観念性を持つ結果、人間関係においては、極度に臆病になり、現在存在する関係を守りつづけるという格好になるという。私などについて言えば、ひどい時は、自分以外のものはみな敵に見えたこともあった。だから、日本人にとって、平和を守るという場合は、現状維持であり、またそのことを、平和を守ることだと思っている。しかし、欧米人の場合のように、外部に向かい内部を守るという形になると、平和というものは、外部状況の変化に応じて主体的に働きかけることであり、平和とは、あるものではなく、建設するものであるということになる。つまり日本人の場合の「ある平和」に対して、欧米人においては「作る平和」なのである。

また、これを日本のタテ社会について言おう。

理想の上役像ということで、次のようなアンケートがあった。「A課長とB課長という2人の課長がいて、A課長の方は、無理な仕事もさせないし無理な怒り方もしない、公平であり平静である。だが、公務をはなれると、部下の面倒をあまりみてくれない。B課長の方は、無理な仕事もさせるし怒り方も無茶なことがある。公平ではあるが時として感情が入ることがある。しかし、部下の面倒は仕事外でもよくみってくれる。どちらの上役がいいか」問うと、日本人の場合80%がBの方を選ぶのである。もちろん欧米人については反対である。日本人においては、部下は、職務上の上役で仕事がよくできるというだけで、上役像を描いているのではなく、自分のことをよく知ってくれるという形で上役像を描いていることがわかる。社員がよく行くバーに盗聴器をしかけ社員意識を考えようとしたことがあったそうだ。おもしろいことに、平社員が集まるとみな決まって上役の悪口をいうのだそうだ。はじめはその悪口も具体的であるが、酔っぱらってくるとみ

な同じ文句になるという。それは、上役は、「俺という人間がちっともわかっていない」という文句である。これは、テレビドラマなどでよくやっているところのことである。この駄々っ子的不平から、つまり部下は上役に対して、人間味のある付き合いを求めていることがわかる。こういう日本のタテ社会にみられる人間関係は欧米ではみられない。これは上が下のことを思ってくれるというだけのことであり、前に述べたように「背後から」見守ってくれることなのである。しかし、このことがうまく行くと、突貫工事を可能にしたりする奇蹟を生むのであるから、日本のタテ社会について私は、これからそこに飛び込んで行く者として単純であるが、興味というべきものがわいてきた。日本の社会には、個人的関係において、裏側に一本の筋が通っている。この二種の関係から日本人の発想は生まれてくるわけで、これは前に述べたうしろ向きの、内側を向いている姿勢に関係していると思う。この内側を向いている守備態勢は、たいへんな欠点を持っていると同時に、こういう長所も生み出すのである。このことは、日本分析のおそろしいほど進んでいる一部の欧米の学者を除けば、一般の欧米人には理解しえない日本独特のものであろう。

また、日本人には「うつむきの姿勢」というもののほかに「察し」と「思いやり」というこれまた日本独自の、おもしろいコミュニケーションがある。これは相手の身になって考えるということである。

日本をあまり知らない外人が日本の旅館にとまって驚き、困惑するものが襖であるという。部屋の中に人が居て、襖が閉ざしてあれば、「入ってくれるな」とか、あるいは、「合図をしてから入れ」とか、また話し声がすれば、「聞いてはならない」とか、または、風よけのために何のへだても意味しないこともあるだろう。こういうことから襖は、まったく不自然なものであり、またそれは、絶対禁止から最小限までの無限の種類をもって作用するということだ。閉めてあるということの意味がどの程度の強さを持つかは、受信者の方に発信者の意志を無言のままに、正確に受けとる能力が要求される。この「察し」という日本人にとってはあたりまえのことが、欧米人にとっては、不可能なほど困難であるのである。あけっぴろげな人の多い欧米人には、閉めてある襖の意味を考えろといっても、とうていわかるはずがないことは確かだ。

また、嫁と姑の問題についても言えることである。お姑さんが夕方外出先から帰ってくる。お姑さんは、30~40分横になってから子供の相手でもしてやろうと思っている。お嫁さんの方でも、夕飯の支度をしていながら、子供の面倒でもみてほしいのだが、お姑さんの、「ただいま」という声から「察して」少し休まれるだろうと思う。しばらくしてお姑さんは、黙って子供をつれて、公園の方へ出ていく。こうしてお嫁さん

の方はお料理に没頭できる。そして、しばらくして、夫と、お姑さんと子供が、うまいぐあいにもどってくる。「ただいま」「お掃りなさい、お疲れさま」それだけで言葉は何も必要ないのである。

このように、「察し」と「思いやり」の世界はうまくいくと最上の世界となるが、ちょっと歯車がくると、収拾がつかない憎悪とひがみの世界をつくりあげるのである。相手の身になって考えるということは、むずかしいことである。この「察し」と「思いやり」の世界は単に家庭内部の問題だけでなく、日本の社会全体についても言えることである。

こうなった原因としては、日本の風土、地理的理由から、感情感覚と発想の方向を共にする一民族国家であったこと、外国からの侵略を受けることなく今日まできていること、日本中が水いらすの一家族のようなものであるということなどがあげられる。しかし、現在においては、家庭においても、社会においても、この「察し」と「思いやり」の心情がだんだん姿を消してきていると思われる。とは言うものの、今まで述べてきたように、内側を向いている人間心理、内側を向いている精神姿勢、またとうてい欧米人には理解しえない「察し」と「思いやり」などが、日本人特有の他にはみられない大きな特徴であると思う。そして、この「察し」と「思いやり」とか「日本人特有のうつ向き姿勢」などについての作者の深い日本人の心理探究とも言うべき考察に、多くうなずけるところがあった。

赤塚行雄

## 『気の構造』(現代新書)

3C 富沢伊智朗

上古の中国人は、万物は「気」によって構成されると考えた。「孟子」「荀子」「列子」「莊子」「呂氏春秋」「管子」など、たくさんの「気」説があるけれど、それらの考えを網羅しつつ、あらためて、この思想を体系的にまとめたものに「淮南子」がある。

「淮南子」天文訓では、最初に虚空があり、虚空から宇宙が生まれ、宇宙のうちに「気」が生じ、「気」のうち、軽くて透明なものは、うすくたなびいて天となり、重く濁ったものは、沈み固って地となったとし、かくて、陰陽二気が生じ、そこから万物が生成された。このように、中国では万物は「気」によって生成され、それゆえに「気」によって支配されている、という思想がある。

中国の「気」と、ギリシア「プシューケー」と、インドの「プラーナ」を比較してみると興味深いものがある。「気」も「プシューケー」も「プラーナ」も、いずれも呼吸の対象となる空気であり、それはまた氣息によって成立した観念である。ただ、インドにおいて



は、個人的靈魂であるアートマン（我）と、世界的生氣であるブラーフマン（梵）との調和合一が説かれたのに対し、ギリシアが個人を中心に考え、中国が自然の中に個人を包含させて考えるといったように、方向が異なっている。アートマンは、もともと氣息を意味し、呼吸が生命の基礎となっていると考え、そこから、自我をあらわす言葉となった。空気を万物の根源であると同時に自己の中心原理とみているわけである。

「氣」は私たちの内なる心の動き、働きであるけれども、しばしば周囲の事情によって働きかけられ、動かされる性質をもっている。「氣」とは、心から出ている目に見えない触手。触覚のようなものである。実際に、生と世界との包括統一は「氣」によって可能となり、精神と肉体の根源的統一も「氣」によってもたらされる。

「氣をかえる」「氣にかかる」…などの「氣」を、「心」と置きかえて考えてもわかるように、「心をかえる」「心にかかる」…などは、自己の内部で持続される意識状態で、「氣」のほうは、その場、その時、瞬間、瞬間に、心から発動されている触手・触覚の反応なのである。生と世界との包括統一と同時に、精神と肉体との根本的統一をはかる「氣」に注目し、「氣の持ちようが大切だ」という用い方からもうかがえるエルゴンとしての「氣」を、著者は強く押し出している。著者によれば、日本の美意識を代表する「いき」も「すき」も「わび」も…つまり、その「氣の持ち方」なのである。

ゲイリー・スナイダーは「来るべき革命」という論文の中で、西欧における「幸福」の概念は、根元的自我、無の中における個人的洞察力によってとらえられてきたとして、美しき明日のためには、この両者をいっしょにして考えねばならないと言っている。ここで、スナイダーが言わんとしているのも「氣」のスウィングのさせ方だと思う。

この本を読んで第一に感じたことは、「氣」というものを日常使っているにもかかわらず、「氣」の意味の深さとか、「氣」の神秘性というものを考えたことがないことである。たしかに、自分の言動一つ一つを考えてみても、「氣」というものがいかに大切であるかがわかった。たしかに、「氣のない返事」などは相手を不愉快にするだけである。

「氣になる」「氣に入る」「氣にくわない」「氣が乗る」「氣がある」「氣を引く」「氣付く」…などたくさん「氣」を日常使っていてもその重要性には、なかなか気づかない。「氣」というのは、自分の内面に働く時と、自分の内から外へ、相手に対して働く時があると思うが、内面的なものより、相手に対して働く場合の「氣」は、現代社会のような、特殊な生活環境の内では、特に氣を付けるべに物だと思う。

中根千枝

## 『タテ社会の人間関係』（現代新書）

3土 古川次雄

この本を読んでまず感じることは、そう言われればというように思いあたる節があるということで、日本の社会は良いにしろ、悪いにしろ世界に例のない独特な社会構造であるということである。

それは一体どういうものであるかという、第一に日本の社会は「場」を強調するということである。

ここで「場」というのは一定の地域とか、資格の相違をとわず、一定の枠によって一定の個人が集団を構成している場をさす。教授、学生というのは資格であり、K大学の者というのは場となる。

これについてはいろんな例が思いあたる。たとえば東大出身となれば（日本の社会においては）その人の人格、資格はどんなであっても東大出身というだけで敬われ、社会的にも認められる。

私はここで一つの疑問がある。前の例にもあるように一流大学という肩書きが、社会へのパスポートのようになっているように思われることである。

一流大学へ入る者は確かに頭もよく努力したに違いない。一般に、そこでの勉強というのは、一流大学に入るだけの勉強でしかないように思われるが、そして実際に一流大学へ入ればあとばどうでもいいのであって、学問に対する意欲はないように思われる。

しかし、この現象は社会のしわ寄せで起ったようにしか思えない。ところで、この「場」で大事なことは集団を構成していくということで、この集団はタテにつながれた集団である。

そしてこの集団に入ると今まで親しかった友も敵になりうることもある。昔いかえると、その集団の中で目には見えない契りがかかわされ、仕事や私生活の面にもはいり込み、そのため親しかった友も、同一集団に属していないと、遠い存在となるのである。

ここで重要なことは、集団内における人間関係というものが、他のあらゆる関係に優先して認識されているということである。この感情的アプローチの招来するものは、たえざる人間接触であり、公私をとわず人間関係が侵入してくる可能性をもち、そして下の者は上の者に対して、敬いの気持ちを忘れてはならなくなる。

なぜなら、上の者に情的に近づくことは、自分の利益になるのだから。よく、結婚式の仲人は、会社なら会社の上役にやってもらうものである。

この他に集団となると、ヨコの集団との連絡はとら

れず、集団同志で勢力を競い合うことである。これは、政党とかヤクザの間によく見られるように思う。

ここで、この集団におけるタテの構造を見てみると底辺のない三角形となっており、そして、能力とは関係のない生年、入社年、学歴が大いに取り上げられる。

つまり、能力平等主義に根ざしているといえよう。だから、会社などでは、社員ひとりひとりに余り差をつけず昇進させるといふところに追いこまれる。

また、課長は一人しかいないのだから、課長代理とか補佐とかいうようにして、序列をつくって処理するしかなくなってくる。しかし、このタテのつながりの特色として上げられるのは、リーダーの下で部下は自由であるということ、これには私も少し驚いた。

よく考えてみると実際に会社の営業をたずさわっているのは、社長や重役ではなく、部長より以下の人である。だから、上に立つものは、いかにして部下の能力を十分発揮させるようにするかが問題となってくる。しかし、自由であるということは、仕事が十分できるという反面、いかげんにもできるということであるが、仕事が自由にできるといっても研究所とか、学会では、その指導的地位に、若い者のはいる余地はないようにも思える。

日本の社会の第二の特色としては、論理的、宗教的でない道徳的な社会であるということである。つまり、論理よりも感情が優先するということである。

これは現実の日本人のひととひとの関係、やりとりにも如実に発揮されている。例えば、異なる主張、考えをもつ者が話し合ったり、議論したりするとすぐ感情に走り、自分たちの主張を叫ぶばかりで両者の間に論理的な発展がない。つまり、日本には真の対話はない。なぜなら、相手に与える感情的影響を考慮に入れないで、発言することはなかなかむずかしいからで、だから、若い学者が先輩の学者に対して、堂々と反論できないのである。

あのノーベル賞をもらった江崎博士が「日本に科学の発達はしない。なぜなら日本人は誰かが何かを發明、発見しようとするとき、どういう訳か非協力的になってしまう。しかしアメリカ人は喜んで協力する」と言ったのを思い出す。

あの人もアメリカへ行ったから成功したと思いたくなってくる。

私も日本人には、このような性格があるように思われる。しかし、ここで私が日本人の意識とか、社会を批判しても仕方のない事である。なぜなら、社会は致命的な欠点をもっているにせよ、一応のスムーズな流れ一応の社会構造はできあがっており、そして私にも日人の血が流れているのだから。

つまりここで大事なことは、日本人というのはどのような性質の民族であるかを客観的に認識することのように思われるのである。



鶴見和子

## 『好奇心と日本人』(現代新書)

3M 渡辺 隆

この本を読んで改めて、「好奇心」ということを考えさせられる思いだ。日頃気につけない言葉なのだが、自分ながら考えてみるとおもしろくもあり、そして少しむずかしく理解できないような事も含んでいるように思った。しかし、読んでいくと各項目ごとに分けてあり興味をそそられてしまい、どんどん読んでいくことができた。

ところで、本の第1章のところで次のように書いてあった。日本人は好奇心の強い国民でそのために日本の近代化の速度が早かった。しかし、早かったためにかえってうわつらの近代化でしかなかった……とこのところを読んでみて、しみじみ考えさせられた。本当に日本の近代化は事実上めざましかった。でも、うわつらの近代化だと思ふとなんだかつまんないような感じもする。やはり日本人の1人だからかも知れないけれど、いや、そうじゃないと言いたいけれどその理由もわからない。そのうわつらの近代化もひと皮むけば、封建時代の人間関係や考え方がむき出しになり、より深いところに古代そして原始の社会構造や心性が生きて働き続けているのかと思うと、なんだか気が重くなる。ところで好奇心が強いために日本の近代化が速く進み同時にうわつらでしかなかったとすれば、好奇心は、日本の近代化にとって、プラス価値とマイナス価値との両面をもたらしたのではないかと思う。それらの内でどちらが多かったかという、マイナスの面の方ではないかと思う。日本人全体としての合体により、多種にわたる面を外国から取り入れ、そ

れをこなして自分たちの実生活に役立ててきた。がむしろに何でもといった方がよいかも知れないが、こういう事は余りいただけないけれど………しかし、それによって一応の世界の文化に通じるものにしてきたその努力には感心させられる。好奇心が強いという事が古代からのわれわれの一つの顕著な特徴であるとしたらそこから生じるマイナス面を乗り越えていくこともまたこの好奇心の働かせ方によって可能になるかも知れないと思う。

ところで考えてみると好奇心を持っているのは日本人だけではない。この本では好奇心は人間にとって普遍的な情動であると書いてあった。この好奇心というのは、それぞれの社会の歴史や風土、社会構造のちがいによってその発動される対象が異なりまた、その強弱というものも、自然とちがってくるものと思われる。だから日本の場合も上のような点などから考えていくとだんだん理解できていけるように思う。

日本人の好奇心が強いとすれば、地理的条件から考えて島国であったという事があげられるだろう。そして歴史的にいつては、鎖国という政策が昔にとられたという事だろう。そして特徴的な社会構造により、それが触発されて今まで促進されてきたのだと思われる。そして、その強い好奇心により逆にそれと同時に社会構造を変動させるエネルギー源であったようにも思える。考えようによっては、この好奇心というものは、日本を支えてきた大切な原動力だったのかも知れない。

話は変わるけれども日本人の好奇心はアジアいや、世界の国々と比べてどうなんだろう。かつてヨーロッパ人は、大航海時代を築いたではないか。これもやはり好奇心の旺盛さがあつたから現出してきたのだと思う。でも現在のヨーロッパ人は、日本人よりも好奇心が乏しいといえる。それでは、かつて近代の始まりにヨーロッパで噴出した好奇心が近代化が高い水準まで達した現在衰えてしまったとすれば、そしてそれよりはるかにおくれ近代化を行なった日本では例えば、イギリスの3倍の早さで工業化しイギリス以上に高度に工業化した現在でもなお、当初の旺盛な好奇心が衰えていないとすれば、それはなぜかという問いが考えられると思う。この問題は非常に興味あることではないかと思う。日本人の性格だからと片付けてしまうのは、余りに幼稚すぎるし………いざ考えてみると大変むずかしい。また中国人との比較で「中国人は日本人に比べて好奇心が弱い。」などと言われるけれど、けっしてそうではないと思う。こういう言い方はまちがっている。なぜなら中国人は日本人が関心を持たないような対象に強い好奇心を集中するかも知れないと思うからである。「日本人は好奇心が強い。」という時すでに比較をわれわれは行なっていることになり、それならば、特定の種類の対象に向かって、好奇心が強いというふうに言い換えなければならない。まず比較す

るには好奇心の向けられる対象についての分類と、強い弱いかを測るものさしを設けなければならない。自分の属する集団内に発生した事物を自生と呼び、集団外に発生した事物を他生的と呼ぶとすると、日本人は他生のできあがつた事物に対する好奇心が強いような気がする。そして、中国人は一般に自生の事物に対する好奇心、物を創り出すことへの関心が比較的強いといえると思う。日本人は外来の新しいもの、珍しいものに対する好奇心が強いと定義できそうな気がする。それは、中国人に比べて、発明や発見などが少なかったという事情が考えられるからだ。例えば、ポルトガル人が漂着して鉄砲をもたらした場合でも日本人は「希世の珍」というふうに驚いたという。しかし中国人はどうだろう。それはすでに自分たちが発明したものの改良品だったので、日本人のように驚かなかつたそうだ。日本人はすでに自生の文化の中に持っている場合でさえも、外来のものを新しい珍しいと思ひこみやすい。日本人が、中国人よりも外来の物への好奇心が強いのはこのような定義の仕方の違いによるものだと考えられる。自分としては中国人のような考え方が理想的だと思うが……。こうしてみると中国人の好奇心には深みのある気がする。日本人もこのような考え方、見方を取り入れていくべきだと思う。文化の発達などとかみ合わせて、好奇心を比較したりするがこういう考え方は、断固まちがっているということがわかつた。中国以外の国々でも、中国と同じような事が言えると思うのである。

イギリスの場合などで、産業革命という事が行なわれたというのも、自生的な好奇心の現われであり、物をつくり出すというそういう考え方があつたためである。現在、ヨーロッパの好奇心というものが乏しいというのならそれはもう、ある程度の物を作り出してしまひまた、その他の事に余り関心を持たなくなつてきて、それで産業革命当時の勢いというものが減退して、今はその好奇心というのがなだらかに、ゆるやかにヨーロッパ人の一人々々の中に持ち続けられてきたためである。一方、日本人はごく最近になつての好奇心というものが、ピーク状態となつたためその状態がまだ持ちこされている。好奇心というものは強くなつたり弱くなつたりするものかということになると、なんとも、つまってしまう。もしかすると、好奇心というのは、自生的への関心の強いときもあり、他生的への関心の強いときというふうに繰り返されていくものではないかと思う。それで自生的への関心が強まつた時に、一般に、あの国民は好奇心が強いなどというのではないか。

話は元へもどるかも知れないが、好奇心の国際比較のところで、スポーツや海外旅行、外来語などの事について書かれてあつたけれど、日本人はなんでもがむしろに取り入れている。つくづくこういうところは

日本人らしいなあと思った。特に外来語のところでは頃使っている言葉が考えてみると本当にメチャクチャに日本語と混ざりあっていて考えられないくらいだ。このところを読んでいても好奇心の横暴さでもいおうか乱暴な感じがしている。日本人の好奇心というものがいかにへたに乱暴に使われているかという事が身にしみてわかった。この本を読んでみて、作者の意図としては、もっと日本人に好奇心の重要性と、いかに好奇心がある面で乏しいかということ、理解してもらおうという事だと思った。最後にこの本をみて『好奇心』ということを実に深く考えさせられるような気がした。実のためになった感じである。

鱒田 豊之

## 『肉食の思想』(中公新書)

3M 鈴木 正有

肉食の思想を読んで最初に感じたことは、食生活というもの、人間の思想を形成する上で重要な位置を占めているのだなあということである。日本人とヨーロッパ人の食生活の違いによる思想の違いがこんなにも関連している事を書いたこの本は、哲学書の中でも特異な存在だろう。

最近では食生活も洋風化して、われわれ日本人は、ヨーロッパの料理はレストランなどの西洋料理店で食べられるものと思いがちであるが、実際のヨーロッパの家庭での料理は、全くと言っていいほど違うという。ヨーロッパに行くと、ヨーロッパ人と同じ家庭で生活するとそれがはっきりわかるだろう。ある日本人がパリを訪れたとき、旧知の人たちが彼を家庭にひきとり食べさせた料理にこんなものがあったという。頸で切った雄雞の頭がそのまま出た。まるで首実験のようだ。あるときは、こうしの面皮が出た。青黒くすきとおった皮に目があって鼻がついていた。まだまだこのような例はいくらでもある。こんなことが日本で信じられるだろうか。動物の生前の形のもものがそのまま食卓にあがるなんて考えられないだろう。それにわれわれ日本人からみると残酷にみえる。しかし、ヨーロッパ人は平気でこれらをナイフで切りフォークでつつく、それも若い婦人がである。血のしたたるような肉をついている婦人を頭の中に思い浮かべることができるだろうか。日本人にはとてもそんな姿が想像つかない。ヨーロッパ人にしてみれば日本人の肉食はままごのようなものだろう。日本人の肉食率とヨーロッパの各国及びアジアの低開発国のそれとを比較すると、日本人がいかに洋風化した現在でもまだ大きなへだたりがあり、アジアの低開発国の肉食率とほぼ同じなのである。ではなぜヨーロッパ人の肉食率がそんなに高いか

について考えてみる必要があるだろう。

日本では主食に米を、そしてそれに添えた副食物を食べる。つまり日本人には主食観念が固着しているのだ。これは主食だけでもある程度は満腹するから、結構ままご的肉食でもやっていると。しかし、ヨーロッパ人にはそういう主食観念がない。一般に日本人はヨーロッパでは主食がパンであると思いがちである。しかし現実には違う。ヨーロッパ人はパンを食べるためにバターを塗ったり、肉や野菜を食べるのではなく、バターや肉などをおいしく食べるためにバターを塗る材料の一つとして利用しているにすぎない。全く日本人とは考えかたが違う。これは主食観念の有無によるものである。日本人に主食観念があるかぎり、日本人の食生活は洋風化することはしても、ヨーロッパ人と同じになることはないだろう。ここには日本、西洋の目に見えない伝統が、それぞれ大きな力となってはたらくしているためでもあると思われる。この食生活の違いで、米日欧米人はしばしば非常に困惑するというものもあろう。

日本では肉食はぜいたくと考えられていた。これは日本の農業を考えればわかるだろう。日本では家畜を飼って肉を取ると飼料100%から回収できるのは6.8%にすぎない。こんな数字では日本人が餓死してしまう。ヨーロッパでこれが成り立つのは、ヨーロッパの人口及び気候風土のためである。風土的条件のもとでは、日本では肉食が一種のぜいたくであり、ヨーロッパではパンがぜいたくなのである。ヨーロッパでは牧草などをつくる必要がないのである。気候風土により家畜に最もよい状態の牧草がふんだんに取れるのである。日本人からみれば、まことにうらやましい話である。従って、これはヨーロッパには雑草がないという驚くべき事実になるだろう。雑草と観念は違うが、牧畜に関してはこれが適応するだろうと思う。日本人にとって牧畜は非常に苦であるが、ヨーロッパ人にとってはこんな楽なことではない。放っておいても牧草は育つから……それに対して日本の気候風土は稲作に適している。これにより米が多量にとれるのでここから主食観念が生まれてきたのだろう。ヨーロッパでは穀物の栽培をスムーズに行なうことができない。すなわちパン食はぜいたくになってくるのである。牧畜に適する所は穀物栽培に適さない。これが食生活に大きな影響を与えているのである。だからヨーロッパ人の肉食率が高いのは、考えかたによっては、けっして彼等が恵まれていたからではない。風土的条件が彼等に穀物で満腹することを許さなかったのである。穀物であれ、畜産物であれ、主食・副食の別なしに口にすることがかれらの生きる唯一の道だったのであろう。自然の力の大きさをあらためて感じる。ヨーロッパでは、穀物に関しては、働きさえすればなんとかなるという可能性はきわめて少ない。ヨーロッパ特有の条件がそれを

許さないのである。ヨーロッパの農民が、しばしば忍従よりも反抗の道を選んだのも、彼等がいつもギリギリの線にたたきだされてきたからにはほかならない。この点日本では「百姓とぬれ手拭はしほればしほる程出るもの」と言われていたのを比較すれば、いかに日本の地が稲作に適していたかもわかるだろう。また家畜の必要性から考えても、せまい耕地の日本と広い耕地のヨーロッパを比べればすぐわかる。日本では役畜は絶対欠くことができない存在ではない。いなければいけないでやっていける。しかし、ヨーロッパの場合はそうではない。食生活上及び農業の面から絶対欠くことができないのである。これらのことからヨーロッパでは主食と副食の区別がないのと同じように、畜産と穀物栽培は対等関係にあるのである。ところでヨーロッパの肉食率が高いということから、肉の必要性を感じると同時に、肉に関係する仕事に対する評価も日本とはかなり違うことが理解できるだろう。ヨーロッパでは精肉業者の社会的地位がきわめて高い。これもヨーロッパの特徴の一つであろう。これらはほんの一例であるが、実際にはいろいろな面で日本との違いが上げられる。そしてヨーロッパ特有の風土のないし自然的条件が、最終的には社会的条件をも規制していることに気づくだろう。従って自然的条件の違う日本とヨーロッパを、同じ目で見ることは間違っているのがわかるだろう。

日本の近代化は善かれ悪しかれ、これまでヨーロッパの形で進んできた。なにかといえれば欧米諸国の例が引き合いにだされ、ヨーロッパ的なものがいろいろなところに進出した。これは外来語の数を考えてみればわかる。この日本のなんでもかんでもヨーロッパ化しようとした姿勢が、現在の社会においていろいろな矛盾を生じたことにも関連がある。もともと基盤が異なるものを同一化しようとした無理の表われでもある。しかし多くのヨーロッパの思想は、日本で血肉化がスムーズに行かなかった。ヨーロッパ化は工業化・都市

化などでは多いにとり入れられたが、思想の分野ではそうはいかなかった。キリスト教の信者数をみればそれが顕著に表われている。欧米諸国では今日、総人口の少なくとも80~90%はキリスト教信者である。が、日本では総人口の0.5%前後である。ヨーロッパ文化の本質的なものが案外日本に入っていないのである。表面的な面だけの類似にかたよったと考えることも可能である。これは日本人には異質的なヨーロッパの思想的伝統は結局、ヨーロッパ独特の食生活パターンのおかげで育てられたためと思ってもよいのではないだろうか。

動物愛護について述べれば、日本では動物愛護というと動物を人間と同じように扱い、動物を絶対殺さないことだと考えやすい。しかし、欧米諸国ではそうではない。そこでは動物を殺すこと自体は、決して残酷ではない。残酷なのは、不要な苦痛を与えることである。日本ではペットを飼っていて面倒がみきれなくなると捨てる。しかしヨーロッパでは殺してしまう。残酷の思想が全く違う。これはあらゆる面であらわれている。食生活に登場する肉を考えればわかる。日本人は大事に育てた牛などを殺して食べることを考えて残酷といひ、ヨーロッパ人は動物は人間に食べられるために存在しているのだから大事に育てるといふ。人間と動物の間に大きなへだたりがあるのである。キリスト教とはこの面からみれば人間中心主義であり、それを信じるヨーロッパ人もまた人間中心主義なのである。日本人とヨーロッパ人の違いは、この人間を中心にして考えるか否かの相違にはほかならないのではないだろうか。キリスト教信者の多いヨーロッパで肉食率の高いのもこれで筋が通るだろう。そして日本人がいかに洋風化しても、それは洋風化であり西洋と同じになる訳ではない。従って、日本人は日本の自主性を優先し日本の個性を発揮し、そのうえで、世界の中の日本となるべきではないだろうか。

## 新着図書目録

図書館にのみ所在する図書を  
分類別受入順に記載

### 総記

世界の名著44	マルクス・エンゲルスII	中央公論社
東洋文庫217	国文学全集2	平凡社
同 248	東西遊記 1	同
同 249	同 2	同
同 250	中国の伝統と革命 1	同
朝日新聞縮刷版49-2	No.632	朝日新聞社
同 49-3	No.633	同
東洋文庫251	イエズス会土中国書籍集 5	平凡社
同 252	海遊録	同
同 253	日本神話伝説の研究 2	同
日本教養全集 1		角川書店
同 4		同

同 14		同
同 18		同
朝日新聞縮刷版 49-4	No.634	朝日新聞社
日本の名著50	柳田国男	中央公論社
出版年鑑 1974		出版ニュース社
世界の名著 続4	朱子・王陽明	中央公論社
日本教養全集 7		角川書店
朝日新聞縮刷版49-5	No.635	朝日新聞社
東洋文庫254	增訂 工芸史料	平凡社
世界の名著 続14	ユング・フロム	中央公論社
日本教養全集16		角川書店
朝日新聞縮刷版 49-6	No.636	朝日新聞社

世界の名著 続15	近代の芸術論	中央公論社
東洋文庫255	中国の伝統と革命 2	平凡社
日本教養全集12		角川書店
朝日新聞縮刷版 49-7	No.637	朝日新聞社
世界の名著 続9	フィヒテ・シュリング	中央公論社
東洋文庫256	小樽日記 1	平凡社
同 258	日本医学史綱要 1	同
日本教養全集 2		角川書店
朝日新聞縮刷版 49-8	No.638	朝日新聞社

### 哲学

シンポジウム  
「日本の神話」4 日向神話 学生社

中井真孝 日本人の行動と思想22 日本古代の仏教と民衆 評論社  
笠原一男 同 25 仏教にみる中世と現代 評論社  
宮家 孝 同 29 山伏—その行動と組織 評論社  
笠原一男編 同 別巻2, 日本宗教史年表 評論社

ヒルチイ 幸福論 白水社  
アラン 人生論集 同  
ショーベン ハウエー 孤独と人生 白水社  
ヒルチイ 暁らぬ夜のために 同  
ショーベン ハウエー 存在と苦悩 同  
思想の歴史1 ギリシヤの神と哲学 平凡社  
同 2 春秋戦国と古代インド 同  
同 3 キリスト教とイスラム 同  
同 4 仏教の東漸と道教 同  
同 5 ルネサンスの人間像 同  
同 6 東洋封建社会のモラル 同  
同 7 市民社会の成立 同  
同 8 近代合理主義の流れ 同  
同 9 マルクスと社会主義者 同  
同 10 ニーチェからサルトルへ 同  
同 11 胎動するアジア 同  
同 12 二十世紀アジアの展開 同

高橋達 人と思想 1 老子 清水書院  
内野豊一郎 同 2 孔子 同  
吉田武彦 同 8 現象 同  
小牧治・泉谷三郎 同 9 ルター 同  
沢田章 同 17 ヘーゲル 同  
村上嘉隆・村上益子 同 26 ロマン・ロラン 同  
坂本徳松 同 28 ガンジー 同  
中野幸二・高岡健太郎 同 29 レーニン 同  
宇野重昭 同 33 毛沢東 同  
村上嘉隆 同 34 サルトル 同  
所井忠雄 同 35 ハイデッガー 同  
倉塚平 異端と殉教 筑摩書房

武田清子 岩波新書862 賢教者の系譜 岩波書店  
高橋元昭 文庫クセジュ542 ヘーゲル哲学 白水社

近代日本思想大系20 大杉栄集 筑摩書房

中野幸次 人と思想 3 ソクラテス 清水書院  
駒島正光 同 4 釈迦 同  
中野幸次 同 5 プラトン 同  
堀田彰 同 6 アリストテレス 同  
八木誠一 同 7 イエス 同  
渡辺清夫 同 10 カルヴァン 同  
伊藤伸彦 同 11 デカルト 同  
小松栞郎 同 12 バスカル 同  
田中浩 同 13 ロック 同  
中野良二 同 14 ルソー 同  
小牧 浩 同 15 カント 同  
山田英生 同 16 ベンサム 同  
菊川忠夫 同 18 J・S・ミル 同  
工藤松夫 同 19 キルケゴール 同  
小牧 治 同 20 マルクス 同  
虎野政直 同 21 福沢諭吉 同  
工藤松夫 同 22 ニーチェ 同  
山田英生 同 23 J・アユーイ 同  
鈴木金吾 同 24 フロイト 同  
関根正雄 同 25 内村鑑三 同  
横山英一 中山義弘 同  
同 27 孫文 同  
金子光男 同 30 ラッセル 同  
小牧治・泉谷三郎 同 31 シュバイッアー 同  
同 32 ネル 同  
中村平治 同 36 ヤスパーズ 同  
宇野重昭 同 1 ヘーゲル 河出書房新社  
同 2 ルソー 同  
同 3 ワエバー 同  
同 4 ニーチェ 同

同 5-6 モンテーニュ 同  
同 7-8 スミス 同  
同 9 ホッブズ 同  
同 10 レーニン 同  
同 11-14 マルクス 同  
同 15 カント 上 同  
同 16 同 下 同

森脇恒雄 麗女狩り (岩波新書742) 岩波書店  
丸山真男 日本の思想 (同 434) 同  
エミル・ブレイエ 現代哲学入門 (同 135) 同  
梅原 弘・岡部伊都子 仏像に思う 下 講談社  
坂本健策 仏教の人間観 同  
鈴木大拙 神と日本文化 (岩波新書75) 岩波書店  
沢田元茂 現代論理学入門 (同 452) 同  
松浪信三郎 実存主義 (同 456) 同  
堀一郎 日本のシャーマニズム (講談社現代新書) 講談社  
梅原弘・岡部伊都子 仏像に思う(上) (同 ) 同  
近代日本思想大系11, 西田幾多郎集 筑摩書房  
清水純一 ルネサンスの偉大と頌揚 (岩波新書825) 岩波書店  
浅野敏一 ヨブ記 (同 693) 同  
岡田良典 現代カトリシズムの思想 (同 781) 同  
浅野敏一 神蹟 (同 835) 同  
野田又士 ルネサンスの思想家たち (同 198) 同  
同 デカルト (同 602) 同  
世界の大思想17 キルケゴール 河出書房新社  
同 18 サルトル 同  
近代日本思想大系12 鈴木大拙集 筑摩書房  
同 バスカル (岩波新書145) 同  
奇書志 同 プラトン (同 836) 同  
近代日本思想大系9, 丘浪次郎集 同  
世界の大思想21 デカルト 河出書房新社  
同 22 バスカル 同

総合講座 日本の社会文化史 7 世界の日本の 講談社  
人類文化史6 西欧の衝撃と日本 同  
野村浩一 中国の歴史9 人民中国の誕生 同  
日本生活文化史8 生活の中の国家 河出書房新社  
国説 日本の歴史1 日本のあけぼの 集英社  
同 2 神話の世界 同  
シュベン グラー 西洋の没落1 五月書房  
同 2 同 同  
青木和夫 日本の歴史5 古代部族 小学館  
坂本實三 日本の歴史6 拮据時代 同  
ドキュメント現代史13 アラブの解放 平凡社  
朝日新聞に見る日本の歩み(昭和9-11年) 朝日新聞社  
日本史探訪 第10集 角川書店  
安田元久 日本の歴史7 院政の平氏 小学館  
江原達彦・伊藤道治 中国の歴史1 原始から春秋戦国 講談社  
星新一 祖父・小倉井良徳の記 河出書房新社  
論集 日本歴史6 歳暮政権 有朋堂  
西川幸治 都市の思想 (NHKブックス190) 日本放送出版協会  
文化庁文化財保護部 全国遺跡地図7 福島県 国土地理協会  
世界地理16 日本1 朝倉書店  
半城らいてり 元始・女性は太陽であった 上巻 大月書店  
同 同 下巻 同  
同 同 同 同  
同 同 同 同  
日本生活文化史2 庶民生活と文化生活 河出書房新社  
同 5 動乱から秩序化へ 同  
竹内理三郎 国説日本の歴史3 古代国家の繁栄 集英社  
色川大吉 明治の精神 筑摩書房  
村井康彦 日本の歴史8 三朝貴族 小学館  
宮城也研究會編 日本庶民文化史料集 第9巻 三一書房  
内嶋定生 中国の歴史2 秦漢帝国 講談社  
色川大吉 明治の文化 (日本歴史叢書) 岩波書店  
半城らいてり 続, 元始・女性は太陽であった 大月書店  
佐久間英 日本人の姓 六兵衛書  
・朝日新聞に見る日本の歩み(昭和17-19年) 朝日新聞社  
日本史探訪11 日本生活文化史6 日本的生活の完成 角川書店  
河出書房新社  
大山宗平 日本の歴史9 鎌倉幕府 小学館  
川島義雄 中国の歴史3 魏晉南北朝 講談社  
布目朝洋・末廣益男 同 4 隋唐帝国 同  
三上丈男 人類文化史4 中国文明と内陸アジア 同  
朝日新聞に見る日本の歩み(昭和12-14年) 朝日新聞社  
同 (昭和15-16年) 同  
日本史探訪 第12集 角川書店  
川崎重之 国説 日本の歴史4 平安の都 集英社  
石井才 人物叢書171 藤海舟 吉川弘文館  
嶋村善彦 日本の歴史10 鎌古襲来 小学館

## 歴 史

ドキュメント現代史1 ロシア革命 平凡社  
同 2 ドイツ革命 同  
同 3 ナチス 同  
同 4 スターリン時代 同  
同 5 大恐慌とニューディール 同  
同 6 人民戦線 同  
同 7 スペイン革命 同  
同 8 レジスタンス 同  
同 9 中国革命 同  
同 10 東欧の動乱 同  
同 11 キューバ革命 同  
同 12 アフリカの独立 同  
同 14 ベトナム戦争 同  
同 15 アメリカの革命 同  
同 16 文化大革命 同



語 学

日本国語大辞典9	ささーしとん	小学館
加藤秀雄		
自己表現 (中公新書231)		中央公論社
日本国語大辞典10 しな一しよ		小学館
研究社新和英大辞典		研究社
小林英夫編		
私の辞書		九思
日本国語大辞典11 しな一せこ		小学館
鎌田正 新訳漢文大系31 春秋左氏伝二		明治書院
内川麻之助		
新訳漢文大系60 玉台新詠 上		明治書院

文 学

明治文学全集34 徳富蘇峰集	筑摩書房
日本近代文学大系12 森西外集II	角川書店
現代日本キリスト教文学全集	
同 7 犠牲と奉仕	教文館
同 10 母性と習性	同
同 11 日常と家庭	同
同 12 信賴と遺毒	同
同 13 戦争と人間	同
同 15 自然と生活	同
同 16 物と心	同
ヴァレリー全集1 詩集	筑摩書房
同 2 テフト氏	同
同 3 対話集	同
同 4 我がフアウト	同
同 5 レオナルド・ダ・ヴィンチ論	同
同 6 詩について	同
同 7 マラルメ論	同
同 8 作家論	同
同 9 哲学論考	同
同 10 芸術論集	同
同 11 文明批評	同
同 12 現代世界の考案	同
同 補巻 補遺 演義講演対談	同
昭和国民文学全集6 子母沢寛集	同
同 9 薄音寺湖五郎集	同
同 16 横溝正史集	同
同 24 石塚洋次郎集	同
同 27 松本清雄集	同
同 29 水上 勉集	同
同 15 大下宇陀児・高木村光集	同
同 18 尾崎士郎集	同
同 22 石川達三集	同

夏目漱石全集5	角川書店
同 10	同
志賀直哉全集7	岩波書店
同 9	同
折口信夫全集22~24	中央公論社
筑摩世界文学大系9 インド アラビア	ベルシャ集
同 46 ソラ	岩波書店
同 73 フークナー	同
同 70 フー・スター・ハックスリ	同
鏡花全集 巻5~7	岩波書店
明治文学全集94 明治紀行文学集	筑摩書房
荷風全集3	岩波書店
同 16~18	同
同 22~23	同
石川淳全集3	筑摩書房
現代日本文学大系45	
依々木茂彦 水上瀧太郎	同
豊島興志雄 小島政二郎	同
久米正雄集	同
同 95 現代句集	同
同 7 1~5	東京創元社
同 9~10	同
同 15	同
同 22	同
現代の文学 2 武田春彦	講談社
同 8 木下肇二	中村真一郎
同 10 藤村野男	秋元松代
同 14 堀田善衛	同
同 15 島尾敏雄	同
同 21 岡川弘之	三浦宗門
同 26 石原慎太郎	同
同 33 河野多恵子	大庭み女子
明島達太郎全集1~2	文芸春秋
同 8	同
同 10~12	同
同 22	同
同 27~32	同
藤村全集8~15	筑摩書房
折田次郎	
孤高の人 上	新潮社
中里和子	
歌枕	同
遠藤周作	
イエスの生涯	同
日本近代文学大系56 近代俳句集	角川書店
近代日本思想大系25 和辻哲郎集	筑摩書房
昭和国民文学全集7 奥田貞久集	同
同 8 国枝史郎集	同
同 11 川口松太郎集	同
同 11 村上元三集	同
現代キリスト教文学全集17 聖書の世界	教文館
鏡花全集 巻8	岩波書店
筑摩世界文学大系20 テフォー・スウィフト	岩波書店
折口信夫全集第25巻	中央公論社
志賀直哉全集第8巻	岩波書店

同 第12巻	同
石川淳全集 第4巻	筑摩書店
モントレーニユ集 (筑摩書房201)	同
藤村全集16	同
バルザック全集18	東京創元社
リルケ全集4~6	筑摩書房
現代の文学4 花田清輝	講談社
山本茂五	
新版 あゝ野麦峠	朝日新聞社
梅原猛	
古典の発見	同
昭和国民文学全集4	林不忘集
筑摩世界文学大系84	近代劇集
明治文学全集80	明治哲学思想集
折口信夫全集26	中央公論社
秀宮孝男	
石と光の思想	勁草書房
バルザック全集8	東京創元社
藤村全集17	筑摩書房
日本近代文学大系6	幸田露伴集
角木順	角川書店
鏡外の精神	筑摩書房
秋心不死男	同
俳句入門 (角川選書52)	角川書店
赤塚行雄	
氣の構造	講談社
昭和国民文学全集25 坂口安吾集	同
筑摩世界文学大系78 魯迅・茅盾	筑摩書房
石川淳全集1	同
鏡花全集	岩波書店
日本近代文学大系35	阿部次郎集
昭和国民文学全集14	小栗虫太郎集
同 17 夢野久作	久生十聖集
同 17 夢野久作	久生十聖集
同 17 夢野久作	久生十聖集
鏡花全集 巻10	岩波書店
折口信夫全集27	中央公論社
筑摩世界文学大系75	ドス、パッサ、スタインベック
志賀直哉全集13	筑摩書房
同 6	岩波書店
藤島全集 別巻上	岩波書店
バルザック全集24	東京創元社
日本近代文学大系49 近代戯曲集	同
昭和国民文学全集5 長谷川伸集	角川書店
同 19 大野真平集	筑摩書房
同 23 獅子文六集	筑摩書房
現代日本キリスト教文学全集	
同 14 聖書と主体	教文館
同 18 キリスト教と文学	同
筑摩世界文学大系85 現代劇集	筑摩書房
折口信夫全集 第28巻~29巻	中央公論社
石川淳全集 第7巻~8巻	筑摩書房
志賀直哉全集 第14巻	岩波書店
明治文学全集66 国木独步集	筑摩書房
鏡花全集巻11	岩波書店
現代の文学5 塩崎春生	講談社
バルザック全集11~12	東京創元社
藤村全集 別巻下	筑摩書房